

マルクス主義の批判者マックス・ヴェーバー

——モムゼン教授の講演——

中 村 貞 二

1

「ヴェーバーとマルクス」と銘打って、現代社会ならびに現代社会科学の基本的諸問題を論じようとする傾向は、現在、たんにわが国においてばかりでなく、社会主義圏を含む全世界的な規模で現れている。昨年5月24日スイスに客死したわが国にもゆかりの深いハイデルベルヒの哲学者カール・レーヴィット教授の古典的労作^①は別格として、ここ10年足らずのあいだに、ずばりところした標題を掲げた海外雑誌論文だけを拾ってみても、かなりの数に上るとみられる。なかでも特徴的なのは、1968年、ポーランド、フランス、東独の三国の雑誌に、そうした標題の論文が一斉に現れたことである^②。社会主義世界内部の諸矛盾が誰の眼にも覆い難く明らかになってきた世界史の現段階において、マックス・ヴェーバーのことに官僚制をめぐる省察が、東西

① Karl Löwith, Max Weber und Karl Marx, in: *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 67, 1932, SS. 53-99, 175-214. Wiederabgedr., in: *Gesammelte Abhandlungen. Zur Kritik der geschichtlichen Existenz*, Stuttgart 1960, SS. 1-67. 柴田・脇・安藤共訳（改訂新版）『ヴェーバーとマルクス』（未来社、1966年）

② Stanislaw Kozyr-Kowalski, Weber and Marx, in: *The Polish Sociological Bulletin*, Vol. 17, 1968, pp. 5-17.

Jean-Marie Vincent, Weber ou Marx, in: *L'homme et la Société*, No. 10, 1968, pp. 87-101.

Rimma Devjatkowa, Max Weber und Karl Marx, in: *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, Jg. 16, 1968, SS. 1356-1361.

ヨーロッパの研究者の注目を集めるところとなり、その視角からあらためてマルクスへの問いかけがなされた、とみてよかろう。が、そのような時論ふうの問題への接近が、多少ともイデオロギー的であり、ヴェーバーにたいする態度がまだ「イメージ主義」の域を脱しきれてなかったとするなら、2年後イギリスのある社会学雑誌に現れた一論文^③は、つぎの提言によって、いかにも新鮮な印象を読者に与えたはずである^④。

「ヴェーバーを指して市民的マルクスあるいはブルジョア・マルクスという。このレッテルは不都合である。なぜなら、このレッテルの物語るものは、ヴェーバーの仕事がマルクス主義にたいするブルジョア的応答以上のものではない、ということだからである。あるいはそうかもしれない。しかしそれ以上のものでもあるのだ。つまり、マルクスおよびマルクス主義の思想にたいするヴェーバーの関係は、たんなる“確認”あるいは“論破”といったディメンジョンにおいて評価すべきではない。ヴェーバーの歴史研究は、歴史の発展にかんする荒っぽいマルクス主義的解釈のいくつかを破壊したと同時に、マルクスの自称門弟たちを向うに廻して、マルクスその人を部分的に擁護したのである。」

「マルクス主義にたいするヴェーバーの批判は、歴史において演じられる観念の役割にかんして、もともとマルクスの構想のなかにあった諸要素を、あらためて闡明したに等しい。」

「マルクス＝ヴェーバー問題」にたいして、二者択一的な思想的対決、あるいはさらに思想的拒否の態度をもって臨むことは、当のマルクスやヴェーバーの流儀に馴染まぬばかりか、折角論じられるべき現代社会科学の基本的な諸問題に、初めから眼をつむってしまう所作でもあろう。「価値自由」な方

③ Anthony Giddens, Marx, Weber and the Development of Capitalism, in: *Sociology. The Journal of the British Sociological Association*, Vol. 4, 1970, pp. 289-310. なおつぎの二著は、この同じケンブリッジの社会学者の手に成る。*Capitalism and Modern Social Theory*, Cambridge 1971; *Politics and Sociology in the Thought of Max Weber*, London and Basingstoke 1972.

④ do, Marx, Weber., pp. 303 f.

法態度の欠除を特徴とするわが精神風土に想到すれば、いやがうえに心すべきことのように思われる。しかし問題の慎重な取扱いが要請されるのは、もとよりわが国だけにとどまらない。たとえば西ドイツには、ことにヴェーバーの人と作品の解釈をめぐる、特殊な問題状況が存在するようである。ヴェーバー生誕百年を記念した第15回ドイツ社会学者大会の討論の席上、ハーバマスは、ヴェーバー研究におけるドイツをアメリカと比較して、ヴェーバー政治社会学の「私生児」(しかし「自然の子」*ein natürlicher Sohn*)はカール・シュミットであり、それゆえにドイツのヴェーバー研究は、つねに一種「政治化的傾向」を示さざるをえないのだ、と告白した^⑤。現在の西ドイツにおいてこの「政治化的傾向」を代表し、ヴェーバー→シュミット→ヒトラーの思想系譜を摘出して、ヴェーバーにおける権力政治家告発の火蓋を切った人は、モムゼン教授であったであろう。彼は1959年以来、未刊の諸種資料を駆使しつつ、ヴェーバー政治思想の究明から出発して漸次その考察を拡げかつ深め、マックス・ヴェーバーの全体像を批判的な視角から描き続けてきたのであった。

が、他方西ドイツには、ヴィンケルマン教授などにみられるヴェーバー文献学といった研究方向があり、さらに「マルクス=ヴェーバー問題」については、レーヴィットの重厚な研究線上に、コッカの細心にして鋭利な方法論上の比較研究^⑥が、あの「政治化的傾向」と並び存していた。しかもそのコッカの業績を高く評価する一人に、モムゼン教授があるのである。彼のヴェーバー研究が単純に「政治化的」なものであるとは思われない。モムゼンを駆ってあれほどヴェーバーに沈潜させるものはなにか、ヴェーバーとの関係における彼の本音をもっと突込んできいてみたい、あるいはさらに、モムゼンにマルクスとマルクス主義を語らせるならどういう語り口になるだろうか、

⑤ Vgl. Jürgen Habermas, Diskussionsbeitrag zu Talcott Parsons' Referat, in: *Max Weber und die Soziologie heute*. Verhandlungen des 15. deutschen Soziologentages, Tübingen 1965, SS. 80 f.

⑥ H. Jürgen Kocka, Karl Marx und Max Weber. Ein methodologischer Vergleich, in: *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, Bd. 122, 1966, SS. 328-357.

——昨年6月14日、新築のデュッセルドルフ大学の研究室にモムゼン教授を訪ね、きわめて聴き取りにくいその独特の早口に閉口しながら、用意してきた質問の意も尽くせぬまま、車中漠然とそのような思いに耽りながら、チュービンゲンの下宿に引き揚げた私は、数日後、当時マックス・ヴェーバー研究所の文庫係であったエリーザベト・コーナウ嬢の、6月15日ミュンヘンで投函された一通の私信を受け取ることになる。そこには、「7月19日木曜日、ヴォルフガング・モムゼンが“マルクス主義の批判者マックス・ヴェーバー”(Max Weber als Kritiker des Marxismus)というテーマをめぐり、ここで臨時講義(Gastvorlesung)を行います。大学の224番教室、大学時間の18時です。云云」と書かれてあった。数日前に会見してヴェーバー研究の現代的意義などについて教授の意見を質し、このテーマに触れるところまで話が及んだにも拘わらず、彼は講演のことなどおくびにも出さなかつただけに、私は一瞬啞然としたけれども、ともあれその日のために、テープを1巻買い足しておくことにした。

2

モムゼンの臨時講義の聴講者は200人足らず。大半は学生であったが、ミュンヘンの年配の教授や若手の研究者の姿も見えたし、マックス・ヴェーバー研究所になにかの形で仕事を持つ者は、所長ヴィンケルマン教授と秘書クライトマイア夫人を除いて、全員(といっても4人であるが)が顔を合わせた。講師の紹介と講義におよそ1時間半が費され、討論にはおよそ1時間があてられた。討論の司会には、講師紹介の労をとった同門の歴史家、ミュンヘン大学の歴史学部長ニッパダイ教授(Prof. Thomas Nipperdey)が当たった。以下モムゼン教授の経歴と業績について、私見を交えつつ若干紹介し、講演への導入部としたい⑦。

⑦ 材料は、モムゼン教授の著書にある著者紹介を基本とするけれども、そのほかになお、ニッパダイ教授の紹介の辞、討論の過程でなされたモムゼン教授の告白、それに6月14日私との対談のなかで示された研究経過の自己紹介などが付け加わる。

ヴォルフガング・モムゼン(Wolfgang J. Mommsen)は、『ローマ史』によって令名高く、ドイツ人として初めてノーベル文学賞を受けた古代史家、ビスマルクに敵対した自由主義左派の政治家、テオドール・モムゼン(Theodor Mommsen, 1817—1903)の曾孫にあたる^⑧。安藤英治教授の行ったヴェーバー家の「戸籍しらべ」によっても一部明らかなおり^⑨、モムゼン家は歴史家一家と言うにふさわしく、紹介者ニッパーダイ教授に言わせると、モムゼン家だけで優に一箇の歴史学部が創設できる。ヴォルフガングの双生児の兄弟で以前はテュービンゲンに居たハンス(Hans Mommsen)も歴史家で、ヴォルフガングの『マックス・ヴェーバーとドイツの政治』の成立には大いに貢献したらしい^⑩。ニッパーダイ教授は、この双生児の兄弟が以前ドイツ歴史家大会に揃って顔を出したところ、「ヴォルフガングはハンスの書いた書評によって、ハンスはヴォルフガングの書いた書評によって、攻撃された」という逸話を披露して、聴講者を笑わせた。

ヴォルフガング・モムゼンは、1930年、ラーン沿いのマールブルクに生まれた。マールブルクならびにケルンの両大学で歴史・哲学・政治学・芸術史

⑧ 周知のとおり、テオドール・モムゼンは父マックス・ヴェーバーの家で開かれていたサロンの常連であった。やがてモムゼン家とヴェーバー家は、テオドール・モムゼンの息子エルンストと、マックス・ヴェーバーの妹クララとの結婚を通して縁戚関係を形成する。

マックス・ヴェーバーがベルリン大学に『中世商事結社史考』(*Zur Geschichte der Handelsgesellschaften im Mittelalter*. Stuttgart 1889)を提出したとき、テオドール・モムゼンは公開討論審査会の席上、あるテーゼについて論戦を繰り広げたのち、「私がいつか墓場に急がねばならぬとき、“息子よ、この槍を持って、私にはもう重すぎる”と言えるのは、このマックス・ヴェーバーを措いて他に居ない」というドラマティックな発言をして後進の俊秀を祝福した話は、よく知られている(Vgl. Marianne Weber, *Max Weber, Ein Lebensbild*, Tübingen 1926, S. 121. 大久保和郎訳『マックス・ヴェーバー』I, みすず書房, 1963年, 91-92ページ, を参照のこと)。ヴェーバーの評点は最優秀“*magna cum laude*”であった。

⑨ 安藤英治『ヴェーバー紀行』(岩波書店, 1972年), 96ページの系図を参照のこと。

⑩ Vgl. Wolfgang J. Mommsen, *Max Weber und die deutsche Politik 1890-1920*, Tübingen 1959, S. XII.

を学んだのち、ケルンのテオドール・シーダー教授の許で、現代ドイツ政治史の研究に携った。ドイツ自由主義の思想史上、政治家ヴェーバーの立場が、ナチズム前史との関連で重要なことに着眼したモムゼンは、1年後に処女大作『マックス・ヴェーバーとドイツの政治』となって現れる学位論文によって、1958年、ケルン大学の Dr. phil. を取得したのち、直ちに“British Council”の給費生として、翌年にかけてリーズとロンドンに留学する。59年に帰国後66年まではケルン大学歴史学部助手を勤めるが、その間61年には、ニューヨークのコーネル大学客員助教授として渡米している。67年ケルン大学で中世史・近世史部門の私講師をしたのち、68年にかけての冬学期ならびに68年の夏学期はカールスルーエ工業大学の歴史学教授となる。そして同年6月以降現在にいたるまで、デュッセルドルフ大学中世史・近世史部門の正教授である^⑩。なお彼は1968年、プリンストンの“Institute for Advanced Study”の客員教授として渡米、71年から72年にかけてオックスフォードの“St. Antony's College”の客員教授として渡英している。

ニッパダイ教授はモムゼン教授の業績を、以下のいくつかのグループに分けている。

1. マックスヴェーバーにかんするもの^⑪

- 1) *Max Weber und die deutsche Politik 1890—1920*. Tübingen 1959
- 2) Zum Begriff der “plebiszitären Führerdemokratie” bei Max Weber,

⑩ かつてマックス・ヴェーバー研究所の助手 (wissenschaftliche Hilfskraft) であり、いまはフランクフルト・アム・マインに転じたザイファート教授 (Prof. Constans Seyfarth) の話では、ミュンヘンにおけるモムゼンの臨時講義は彼のミュンヘン転出の先触れではないか、とのことであった。新設のデュッセルドルフ大学の図書館は一見して貧弱であるし、それに他大学から招聘される教授は、かならず以前の金額を上廻る報酬を得るのがドイツの大学の慣行のようである。

⑪ “Suhrkamp Taschenbücher Wissenschaft” の一冊 (Bd. 53) として、“Max Weber” という標題の論文集が、フランクフルト・アム・マインのゾーアカンパ社から間もなく刊行されるはずである。(予定では遅くも今春ということであった。) これには、(3)、(4)の二論文のほかに、(1)の最終章“Vom liberalen Verfassungsstaat zur plebiszitären Führerde-

in: *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, Bd. 15, 1963

- 3) Universalgeschichtliches und politisches Denken bei Max Weber, in: *Historische Zeitschrift*, Bd. 201, 1965 (auf Englisch; Max Weber's political sociology and his philosophy of world history, in: *International Social Science Journal*, Vol. 17, 1965)
- 4) Die vereinigten Staaten von Amerika im politischen Denken Max Webers, in: *Historische Zeitschrift*, Bd. 213, 1971
- 5) *The Age of Bureaucracy. Perspectives on the Political Sociology of Max Weber*. Oxford 1974

2. 帝国主義にかんするもの^⑬

- 1) *Agypten und der europäische Imperialismus. Der Aufstieg der ägyptischen nationalen Bewegung*. München 1961
- 2) Nationale und ökonomische Faktoren im britischen Imperialismus vor 1914, in: *Historische Zeitschrift*, Bd. 206, 1968
- 3) *Das Zeitalter des Imperialismus*. Fischer Weltgeschichte, Bd. 28, Frankfurt am Main 1969

3. そのほか上記の研究の副産物とみられるもの^⑭

1) Edmund Burke und die Französische Revolution, in: *Politische Demokratie* が加わり、序章に "Max Weber als Repräsentant des europäischen Liberalismus" (筆者未見) を配し、結章としてミュンヘン臨時講義をもとにした論文 (題名は "Max Weber und Karl Marx" となるかもしれない) が収まるはずである。筆者らによる邦訳が未来社から出版される予定。

- ⑬ 彼はいわゆる「フィッシャー論争」にも参加して、「一方でフィッシャーの第一テーゼを基本的に支持しながら、他方では論争の急進化に歯止めをかける」という「重要な位置を占めた」という。筆者は「フィッシャー論争」の経過と内容に暗いので、このニッパードイの批評の当否を云云できない。W.J. Mommsen, *Die deutsche Kriegszeitpolitik 1914-1918*, in: *Kriegsausbruch 1914*, München 1967 のあることを示すにとどめる。
- ⑭ ナウマン全集 (*Friedrich Naumann Werke*. 6 Bde. Köln und Opladen 1964) のシーダー編集分の4巻 (Bd. 2-5: *Politische Schriften*) のうち2巻 (Bd. 2: *Schriften zur Verfassungspolitik*, Bd. 3: *Schriften zur Wirtschafts- und Gesellschaftspolitik*) は、モムゼンを共同作業員としていることも記しておかねばならない。

Ideologien und nationalstaatliche Ordnung. Festschrift für Theodor Schieder, hrsg. von Kurt Kluxen und Wolfgang J. Mommsen, München 1968

2) *Die Geschichtswissenschaft jenseits des Historismus.* Erweiterte Fassung einer am 3. Februar 1970 an der Universität Düsseldorf gehaltenen Akademischen Antrittsvorlesung. Düsseldorf 1971

ニッパダイ教授は、モムゼン紹介の言葉を大略つぎのように述べて締めくくり、その学問性格を特徴づけた。——

彼は、ながくわれわれの科学（歴史学）の支えになっていた現代社会科学の傾向、問題、カテゴリーを取り上げて、これをわれわれの科学の中に持ち込んだけれども、他方ではしかし、歴史主義の確固とした遺産、つまり真に歴史学的な問というものを、誤ったあるいは性急な一般化から守った。もしこのように言えるとするれば、彼がテオドール・シーダーの最高の門弟たちの一人であることに変わりはない。しかし同時にまた、そうした素質を、独特の仕方で発展させる男でもある。かくて彼は、現代ドイツ歴史学を代表する若い世代——厳密に言うと中年の世代——の一人である、と。

ニッパダイによるこのモムゼン批評は、多分「フィッシャー論争」で彼の演じた役割や、さらには社会科学としての歴史学という立場を強く打ち出そうとする彼の歴史理論が、師シーダーとのあいだに一定の溝を作っていること^⑮などを念頭において、なされているのであろうが、「マルクス主義の批判者マックス・ヴェーバー」の講演から受けた私の第一印象は、良い意味でも悪い意味でも、彼は歴史家だということであった。歴史家としての自負が講演するモムゼンの心理的な支えになっているように見受けられた。「私は経済学の歴史に暗い」とか、「生粋の社会学者ではない」とか、「哲学の素養の不足を感じている」とかいった、各方面からの質問への応答に出てくる彼の言葉は、あながち謙遜の表現とばかりも言いきれまい。そもそもマルクスと

^⑮ Vgl. Mommsen, *Die Geschichtswissenschaft jenseits des Historismus*, Düsseldorf 1971, SS. 24 ff.

ヴェーバーという社会科学の二大巨匠における核心的問題を、現代の問題にてらしつつ、包括的に論じようというのであるから、「生粋の」「専門科学者」の手には負えないこと、けだし自明と言うべきだけれども。だがモムゼンは、どうしてこういう超大テーマと取り組む危険をあえて冒そうとするのか。——「生粋の」専門家ではありえない歴史家の特権において、と彼は答えるであろう。モムゼンのヴェーバー研究の「到達点」は、どうしてマルクスとの対比とならざるをえなかったのか。——ヴェーバーの抱懐する問題そのものの必然性によって、そして「現代の問題」に触発されて、と彼は答えるであろう。

ヴォルフガング・モムゼンといえば、わが国ではマックス・ヴェーバー告発者という、これまた「政治化」されたイメージが強いかもしれない^⑩。それは正しくない。少くとも彼のヴェーバー研究の道程を瞥見し、彼がヴェーバーの社会学や学問論に与えている高い評価のことを考慮するとき、それは正しくないと、私は思う。ヴェーバーにたいするモムゼンの関係は、丁度マルクスにたいするヴェーバーの関係のように、アンビヴァレントであるといえようか^⑪。

司会者ニッパードイみずからの質問に答えるなかで、モムゼンは自分の処女作を指して「かなり無邪気な本」(ein ziemlich unschuldiges Buch) だと言った。またザイファートの質問に答えるなかで、「ヴェーバーの政治的側面」についてはもう「退屈に」(langweilig) になってしまった、「いまでは体系的な側面のほうが私の関心を惹きつける」とも言った。事実モムゼンのヴェーバー研究は目を瞠らせる成長を示していると言って過言でないのであって、初期の「政治化的傾向」はいわば軟化を来し、ヴェーバーの人間を見据える

⑩ たとえば、徳永恂『社会哲学の復権』(せりか書房、1968年)、151ページにおける表現様式を参照のこと。

⑪ モムゼンの処女作にたいする^{はなぶさ}英明教授の周倒な書評(『一橋論叢』第48巻、第1号、昭和37年7月号、所収)は、彼の行論の「曖昧さ」を指摘したけれども、それは、基本的に、彼のヴェーバーにたいする含み多い立場と独特の手法に基づくものと、私には思われる。

ところからその全体像の把握へと進んできている。論文「マックス・ヴェーバーにおける普遍史的思考と政治的思考」がこの転回を告げるであろう。ここではヴェーバーの政治思想と政治社会学が、その歴史哲学的構想の深みから掴まえている。ここでヴェーバーにおける歴史哲学的構想とは、「合理化とカリスマとの交替する不断の闘争」という「擬似弁証法的な構想^⑱」と理解され、そのかぎりガス/ミルズ^⑲やベンディックス^⑳の解釈が踏襲されているが、モムゼンの場合この「歴史哲学」がニーチェの思想に近接せしめられることによって、「歴史哲学」は政治家ヴェーバーの定位に役立つ一方、学問研究者ヴェーバーの学問論と社会学への道を同時に拓く恰好になっている。モムゼンの考察の重点は後者に移ってきている。本人に会って確かめたところ、マックス・ヴェーバーの思想にたいする基本的な立場に変わりはないが、ヴェーバー研究の意味と意義には変化が生じた、ということであった。推測まじりに言えば、つぎのようなことになるだろうか。いまやヴェーバーはマルクスと並んで、現代社会の総体認識のために絶好の見本を提供している、これはわれわれのアクチュアルな問題関心に応えるものであって、これまでのドイツ的＝「政治化的」な論議は「国際的」な論議の地平に止揚されねばならない、と。そしてそのための試論がミュンヘンの臨時講義であった、このように私は理解している。

以下の邦訳にあたって、私はテープを起すことから始めねばならなかった。聴講者の咳に加えて様ざまな雑音のきこえてくる大教室での講演、しかも独特の早口で原稿を棒読み(vorlesen!)するモムゼンの言葉、白熱の討論はいわずもがな、何度テープを聴いても、机上の洋紙の空白箇所は一向に埋まらないのであった。テープに収録さえすれば、と多寡をくくっていた私は、途方に暮れて、テュービンゲンのボルン教授(Prof. Karl Erich Born)の秘書

⑱ Dirk Käsler, Einleitung zu: *Max Weber, Sein Werk und seine Wirkung*, hrsg. von Käsler, München 1972, SS. 24 f.

⑲ Hans H. Gerth / C. Wright Mills, *From Max Weber. Essays in Sociology*. New York 1946.

⑳ Reinhard Bendix, *Max Weber. An Intellectual Portrait*. New York 1962.

シュペート嬢 (Frl. Hedwig Spaeth) に相談した。彼女は同僚のパウル夫人 (Frau Paul) を紹介してくれた。マルクス主義には興味があるし、なんとかやれそうだと、彼女は録音を文字に直す仕事 (Übersetzung!) を引き受けてくれた。しかし彼女もついに音をあげたので、とうとうボルン教授の門弟でドイツ社会政策学会の歴史^①を書いたテュービンゲンのリンデンラウプ博士 (Dr. Dieter Lindenlaub) の耳を煩わすことになった。その結果、私はニッパダイ教授の開会の辞 (紹介) とモムゼン教授の講演の始め $\frac{2}{3}$ 、そして討論の殆どをタイプ文字で読むことができるようになった。講演の残り $\frac{1}{3}$ は、帰国のため時間切れとなったので、テープをそのまま日本に持ち帰り、私は山口で、またしてもプロット師 (Pfarrer Rudolf Plott) の時間を奪う始末となった。快く助力を申し出られた以上の人びとの甚深の御好意によって、私は、モムゼン教授の臨時講義とそれをめぐる討論を、わが国に紹介することができる。ふかく御礼を申しあげる次第である。

多くの人びとの好意にすがってできた以下の邦訳も、しかし講義の一語一語をそのまま写し取ったものではない。ひとつには克服されずに残った意味不明の箇所がいくつもあること、そしていまひとつ、テープの入替えのため少時間空白部分が生じたという事情がある。そのようなところは訳者において適当に端折り、大意を取ることで満足しなればならなかった。逆に訳者の手によって多少の語句を補ったところもある。なおヴェーバーからの引用については、能うかぎり原典と照し合わせて、モムゼン教授の引用の言葉では不十分なところおよび少数の誤りを補正しておいた^②。

① Dieter Lindenlaub, *Richtungskämpfe im Verein für Sozialpolitik. Wissenschaft und Politik im Kaiserreich, vornehmlich vom Beginn des "Neuen Kurses" bis zum Abbruch des Ersten Weltkrieges (1890-1914)*. 2 Tle. Wiesbaden 1967.

② ひと月前『職業としての学問』をドイツ語のテキストとして南江堂から公刊された渡辺金一教授の、教科書への注釈における徹底した考証的態度をみるにつけ、まことに忸怩たらざるをえないのであるが、本誌編集委員との約束をすでに数か月も破って、原稿の提出を遅らせてしまったという事情もあるにはある。併せてこの場を借り、編集委員諸氏にお詫びしたい。

3

マルクス主義の批判者マックス・ヴェーバー

ミュンヘン，1973年7月19日

ヴォルフガング・J・モムゼン

同僚諸君，会場の皆さん。

私を持ち上げたニッパードイさんのきわめて温かいご紹介のあとをうけて、
どう言えればいいか弱っています。ニッパードイさんが拵えた姿といまの私が
一致しているかどうか、私にはまったくわかりません。ここで諸君を前にお
話しする機会を与えられたことに、ふかく感謝します。今日のテーマは、私の
ざっと12年間のヴェーバー研究の一種の到達点を示すものですが、同時に私
は、これをひとつのテストケースだとみております。今日ここで試みるかな
り大胆な解釈が支持されるかどうかのテストケースというわけです。

近代産業資本主義の興隆とそれに伴って動き出した社会、これがマックス・
ヴェーバーの社会学上の著作を支配しているテーマです。すでに1893
年、ヴェーバーは、資本主義が近近数世代のうちに、伝統に拘束されたあら
ゆる社会構造を破壊してしまい、伝統的な構造が再び現れることは決してな
いだろうと診断しました。近代資本主義はまったく革命的な力であると彼は
書き、近代の資本主義的経済秩序の凱旋行列の行手を阻むことは、いかなる
方法を講じても不可能であると考えておりました。彼の学問上の著作の大き
い部分は、産業資本主義がいかなる社会的・文化的影響を齎したか、また齎
すであろうか、という問と取り組んだものです。しかも彼の観点は、そうし
た影響が西洋の自由主義的な社会の将来にとって一体なにを意味するだろう

か、というものだったのです。こうしてマックス・ヴェーバーは、カール・マルクスならびに将来の社会主義社会についてのマルクスのモデルを検討しなければならないところに追い込まれました。考えようによっては、マックス・ヴェーバーの社会学は、社会学者の認識方法を使って、マルクスに与しないもうひとつの立場を定式化する試みだとみることができます。が、この立場は、ヴェーバー自身の市民的-自由主義的な理想と共鳴するものではあっても、しかし資本主義社会にたいする社会主義者の批判をあっさり退けてしまうといったものでもありません。

マックス・ヴェーバーは、カール・マルクスとわれわれとの中間にある世代のひとりです。彼の政治的-社会的な、そして社会的な見方が基本的に形成されたのは、20世紀の最初の10年における資本主義の異常に激しい成長期のなかにおいてであります。資本主義体制の成熟期への突入を示す産業上の大結合、トラスト、さまざまな種類の独占、こうしたことが眼の前で繰り広げられました。事態のこうした展開を資本主義の古典的・自由主義的な理念像と較べてみると、資本主義の現実はずしく変化してしまったという感懐を彼は隠すことができませんでした。ヴェーバーはこの新しい展開から眼をそらしはしませんでした。いやまさしく反対にこのものをこそ思索の中心に据えたわけですが、にもかかわらず彼は生涯、もとより自由主義的なスタイルをもつダイナミックな資本主義の熱心な擁護者であり続けたのです。彼の社会学が被う範囲のことを考えてみれば、ヴェーバーは理論の平面でカール・マルクスの最大の敵役を演じた、だからして彼は、たしかに「市民的マルクス」(ein bürgerlicher Marx)である、とこのように言うことができるかもしれません。よく知られていることですが、マックス・ヴェーバーは、自分自身を特色づけて、市民的なものの方と理想のなかで育まれた市民階級の一人だとしましたし、1907年には、ロバート・ミヘルス (Robert Michels) とドイツ社会民主党をめぐって議論したとき、自分の妻がいまでは工場の株主になったことを付け加えて、自分を「階級意識あるブルジョア」(klassenbewußter Bourgeois) とみることが、ミヘルスにたいしてはっきり要求して

おります。

にもかかわらず、マックス・ヴェーバーが自分自身の立場にいつも反省を加えてこれを批判的にみることを怠らなかつたというあの性癖に思いついたるとき、ヴェーバーを固有の意味で一個のブルジョアと呼ぶには躊躇を感じるのであります。ヴェーバーは、彼自身の社会学の用語の意味で、むしろ一個のインテリゲンツィア、固有の意味での経済的階級には組み入れられないひとつの社会集団に属する者であります。ヴェーバーは、ブルジョアというよりはむしろ決断して成ったところの自由主義者 (ein dezidiierter Liberaler) なのです。この自由主義者にとって人格の自律は譲り渡すことのできない原理であって、この原理からして彼は、資本主義の本性を問いつめたし、またその対抗モデルたる社会主義の本性を問いつめたわけです。そこから明らかになることは、社会構成体としての資本主義にたいするヴェーバーの態度が完全にアンビヴァレントであることです。彼は左翼の批判者たちにたいして資本主義体制を懸命に擁護しました。——批判は労働運動の陣営からも出ました。インテリのあいだからも出ました。そうしたインテリに向ってヴェーバーは、君たちはゼネストや革命のロマンティックに屈しているのだ、と言いました。——ヴェーバーは資本主義体制をそうしたグループから弁護したにもかかわらず、他方では長い眼でみて、この体制の齎す非人間的な作用を断固として告発しました。

ヴェーバーによる近代資本主義分析の出発点は、マルクスの出発点から決して遠く離れてはおりません。産業資本主義から生れた社会的諸条件——ことに鉄の労働規律と、一個の人格として責任をとる態度が日常的労働から駆逐されるということ——のもとで人間の尊厳はどうすれば守り通すことができるか、というヴェーバーの問は、労働者の社会的疎外克服の道を示そうとするマルクスの苦しみと完全に肩を並べております。マックス・ヴェーバーは基本的な点でマルクスと反対の立場にあったのに、マルクスの理論的な著作をいつも真剣に考えたこと、あえて言うまでもありません。彼はあるとき『共産党宣言』を指して激越な預言だと言ひ、また同時に第一級の科学的業

績だと言いました。さらにエドゥアルト・バウムガルテン (Eduard Baumgarten) の報告によれば、マックス・ヴェーバーはその晩年、ある学生に向けてこう言ったということです。「今日の学者、ことに今日の哲学者の誠実度を測る物差しは、彼がニーチェとマルクスにどういう態度をとっているか、ということである。自分の仕事の最も重要な部分がこの二人のやった仕事をぬきにしてはありえないことを承認しない者は、自分自身を欺き、他人を欺く者である。われわれが精神生活を営む世界は、大凡マルクスとニーチェが植えつけた世界なのだ」と。マックス・ヴェーバーが彼独自の精神の高みに達したのは、完全に対立するこの二人の思想家との断えざる論戦を通してである、このように言ってよろしかろう。

他方マックス・ヴェーバーは、その学問的生涯の初期においては、マルクスとエンゲルスをほとんどオリジナルでは勉強しなかったようにみえます。すくなくとも 1906 年までヴェーバーはその論文のなかで、当時流行の俗流マルクス主義的なマルクス主義の解釈を専ら引合いに出しております。マルクスそのものへの言及はともかくまったく見当りません。その当時のマルクスおよびマルクス主義との対決は、主として科学論上の作品のなかに見られますが、ヴェーバーは再三、そのころ史的唯物論 (historischer Materialismus) と呼ばれていたものから、はっきりと身を隔てております。ヴェーバーは歴史にかんする唯物論哲学を原理上ことごとく拒否しました。歴史的経過の客観的な法則や、あるいはまた歴史過程そのものの内的な意味をみつけたと称する歴史哲学をば、彼は詐欺だと言いました。彼の立場は、ニーチェ的な諸原則で満たされた新カント主義 (ein mit nietzscheanischen Grundsätzen aufgefüllter Neokantianismus) だと言えればおそらくその特色を言い当てたことになるでしょうが、この立場からすれば、歴史過程の客観的な構成はおよそありえません。——このことはまたいわゆる史的唯物論についても言えることですけれども。——ヴェーバーによれば、理念型の助けによって社会過程にかんする法則類似的な理論を構成することができるだけです。そうした理論は、この法則論的モデルから社会的現実の特定の断面が偏っている度合

を決定するための基準として役立ちます。この機能は、ヴェーバーによれば、理論経済学における法則に近いばかりか、場合によっては、前資本主義的な社会構造から市民的-資本主義的構造、そしてついに社会主義へと弁証法的に進んでいく歴史の発展過程にかんするマルクスの理論にも近いものです。だがヴェーバーによれば、そうしたからといって現実そのものが記述されたわけでは決してありません。このことを彼は、『社会科学および社会政策の認識の“客観性”』にかんする論文のなかで、すでにきわめて鋭く定式化しております。ここでひとつ引用させてもらえば、事情がはっきりします。

「諸文化現象の全体は、“物質的な”利害状態の産物もしくは函数として演繹できる、われわれはこのような古ぼけた信念から自由になってはいけるけれども、しかしわれわれもまたわれわれなりに、つぎのように信ずるものである。社会的な諸現象と諸文化過程の分析を、その経済的な被制約性と影響力という特殊な観点のもとで行うことは、豊かな実りを齎す科学上の一原理であった。取扱いを慎重にして独断に陥らないかぎり、いつまでもそのようであるだろう。“世界観”としてのいわゆる“唯物史観”もしくは歴史的現実を因果的に解明するうえで公分母となるような“唯物史観”，そういうものとはキッパリ手を切るべきである。」

ともあれこの段階のヴェーバーは、マルクスとマルクス主義の理論とを、あまり分化させることなく解釈しておりました。封建制から資本主義にいたり、ついに社会主義へ行きつく必然的かつ非可逆的な過程というマルクスの構想は、ヴェーバーが理解したような意味での純存在論的な言明では決してなく、ひとつの理論——結局は実践の方向づけに役立つ理論、そしてこれが現実となるためには人間の力強い行為を必要とする理論——だったのです。ブルジョアの積極的な行為によって初めて資本主義社会は成立するし、プロレタリア自身による社会主義革命をぬきにしてはいかなる社会主義社会もありえない。マルクス理論のこの行動主義的要因は、エンゲルスさらにはカウツキーによる後の解釈によって曖昧にされました。彼らによってマルクス主義は、あの硬化した機械論的な理論と化し、これを指してひとは一般に唯物史観

(materialistische Geschichtsauffassung) だと言ったのです。

ヴェーバーがいま引用した箇所を書き下したとき、彼は、カール・マルクスの理論と彼の正統な後継者たちの加えた解釈とのあいだには、実質的な差異のあることが、よくわかっていませんでした。この二人の思想家の方法論上の操作を、わけてもユルゲン・コッカ (Jürgen H. Kocka) がやったような仕方で注意ぶかく比較してみると、マルクスとヴェーバーのとった手続きは、ヴェーバーがいつも想定していたほどには大きく違うものではないということがわかります。特定の立場から意義の認められる特定の因果の鎖を歴史的現実の彫琢を通して得るという仕事を、ヴェーバーが初期の著作のなかで試みたとするなら、このやりかたとマルクスのやりかたとのあいだに、原理上の区別はありません。もちろんヴェーバーは、マルクスと違って、このようなやりかたで掴まえられるのは社会的現実の断片にしかすぎないのであってその総体ではないということを、ほとんど自虐的なまでに認めておりました。彼は、理念型的なモデルの構成を越えてその先に行くことは不可能である、いや不誠実ですらある、と考えていたのです。言葉を換えて言えば、彼の方法論からすれば、歴史過程の客観性にかんするマルクスの掴みかたはひとつのフィクションでありました。ヴェーバーがカール・マルクスの説におけるこうした要因に、ことにその当時の教科書に現れたような粗雑化されたかたち、再三くってかかったのは、けだし偶然ではありません。

これには認識論的根拠があったばかりではなく、いわば倫理的根拠がありました。なぜとって唯物論的な歴史把握は、ヴェーバーの掴みかたによれば、さまざまな究極の価値のうちどれかひとつの決断をつねに迫られている自律的な個人の責任意識を、致命的に弱めるにふさわしいものでしたから。歴史は客観的な社会過程によって決定されているという思想は、容易に諸個人を導いて、事物の客観的と思われる経過に人びとを適応させてしまいます。たとえどんなことが起ろうとも自分自身の究極の確信と姿勢に忠実であり続けることを止めさせます。「適応」(Anpassung) という言葉は、ふつうヴェーバーの語彙のなかでも最もネガティブなもののひとつであります。

こうしたヴェーバーのものの見方は、ドイツ社会民主党にたいして下した判定のなかに出てまいります。ヴェーバーはドイツ社会民主党にたいして、繰り返し最大の軽蔑をこめた言葉を吐きました。市民的世界にたいする社会主義の勝利は時間の問題にすぎないと、社会民主党は主張し続けていたからです。このような態度は、ヴェーバーの摑みかたによれば、たんに道徳上嘆かわしいばかりでなく、ウィルヘルム時代のドイツ社会民主党の政治的弱体の主要原因のひとつでもありました。この党が歴史過程のもつ力に寄せている盲目の信頼に対して、ヴェーバーは1906年、最高度に辛辣な非難をたたきつけました。

「経済的な社会再編成それ自体が内的に自由な人格の発展とか利他主義的な理想とかをその中に含み込んでいるなどということは、どうみてもありえない。物質的な発展がみずから担っているとされるそうしたものの萌芽らしいものを見つけようとするなら、社会民主党は彼岸の樂園——此岸的なものに奉仕するなかで真に注目すべき成果を示しえたピューリタニズムの彼岸の樂園——ではなくて此岸的なものを挙げる。この場合社会民主党は、現存秩序の利害関係者に一種の種痘を施しているのである。」

ヴェーバーのなかに住む自由主義者ばかりでなくニーチェの徒が、このようなマルクス主義の正統派的な、その根底において静寂主義的な立場に抗議したのです。そこでヴェーバーの態度は多分つぎのようにまとめることができます。彼にとってマルクス主義は、ただ二つのかたちのみで受け容れられるものであった。すなわち、ひとつの政治論として。——客観的・科学的真理に訴えるのではなく、倫理的な信念に基づいて、不正とされる社会秩序への革命の闘争を、結果にたいするいささかの顧慮もなく、画策する政治論として。そうでなければ、燦然たる理念型的仮説のひとつの体系化として。——これにたいしては社会科学者たる者すべからく最高の注意を払うべきである。

マルクス主義にたいするヴェーバーの態度をもっとこまかく分析してみる

と、まずつぎのことがわかります。ヴェーバーは上部建築にかんするマルクス主義の理論にたいして、とりわけくってかかりました。あらゆる社会現象は究極のところ経済的原因にかかわらしめることによって十全に説明することができるというテーゼを受け容れる用意は、ヴェーバーになかったのです。

「経済的なものが、なんらかの意味において、原因系列のうちなにか究極にあるものだとする唯物論的な歴史把握の周知の見解は、私見によれば、科学的にはもとより片付けられたものである。」

この点にかんしてマルクスとエンゲルスのとった立場にはもっと厚みがあった、これをヴェーバーが見逃したことは、もちろんここで付け加えておかねばなりません。ともあれヴェーバーが、社会の諸現象を究極のところ経済的原因にのみ還元させるようなことがあってはならないとしたことは、逆に彼がひとつの観念論的な反対の立場を表明したことを意味するものではありません。有名な論文『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の“精神”』は、観念的な、とくに宗教的な要因が歴史過程において独立の役割を演じることを論証しようとする試みであるとみられます。現にヴェーバーは、1918年、プロテスタンティズムの倫理にかんする研究の諸成果を、「マルクス主義的歴史把握のポジティブな批判」と題して、ウィーン大学で講義しました。がそのさいの彼の気持は複雑です。なぜなら、自分のプロテスタンティズムにかんするテーゼが、産業資本主義はいかにして、またなぜ成立したのかという間に完璧な仕方で答えるものであるなどと、彼は一度も主張しなかったからです。むしろプロテスタンティズムの倫理にかんする研究は、資本主義の勃興に寄与した諸要因のうちただ一群のものを指摘したにすぎないと、繰り返し述べております。この関連でつぎのことを知っておくことが大切です。それは、成熟した資本主義はピューリタンの禁欲主義の齎した独特の経済心術をもはや必要としなくなったと彼が指摘したかぎり、彼はまさしくここで、いろいろの点からみてマルクスに甚だ接近しているということです。ヴェーバーはほとんどマルクス主義者の言葉で、近代資本主義体制は人間を強制する社会的な力、欲しようが欲しまいが、みずから作り出した社会的諸条件

への隷従を人間に強制する、そうした社会的な力であると書きました。人間にとって選択の余地はない、ひとは職業人であらざるをえない。——近代産業資本主義の体制は、それ以外の何者かであることをもはや許さないからです。資本主義体制が人間に加える機械的な力について書いたとき、ヴェーバーは、資本主義は結局のところ、それ自身のなかに自分自身を破壊する傾向を秘めた非人道的な社会秩序である、というマルクスの確信に近付いたのです。

しかし他方において、ヴェーバーが社会学の方法で精確に規定しようとした資本主義体制に内在するこの趨勢を、ひとつの客観的な発展法則と直ちに同一視することは、彼の拒否するところとなりました。官僚制時代の伸長という普遍史的展望は、ヴェーバーの学問上の著作のなかにたびたび姿を現します。けれどもこの展望は、存在にかんする歴史哲学的な主張にまで固まりはしません。それは、社会過程の意義を見定める一種の導きの糸として、仮説として役立つだけです。ここにマルクスの歴史観とは質的に異なるヴェーバーの歴史観がはっきりと現れます。マルクスはヘーゲルの流儀で、資本主義社会の発展の趨勢にかんする彼の分析を、歴史理論の形式のなかに流し込みました。一方ヴェーバーのばあい歴史のトータルな見方は、すべてたんに仮説的な性格を持つにすぎません。それは方向づけに彼立ちますが、それだけが永遠の真理だとは見なされません。ヴェーバーがこの過程の進行を阻む反対の諸力や傾向を探し求めたのは、そのような彼の姿勢があつてのこととあります。

マルクス主義理論の個々の要素にたいしてヴェーバーがどういう態度をとったかということも、この基本的な見方に照応させてみることができます。生存の物質的な諸条件が人間の行為を隅々まで規定するとのテーゼを、ヴェーバーは具体的な社会的行動を規定するための法則論的なモデルとして受け容れたのであつて、概念のなかに流れ込んだ真理として受け容れたのではありません。こうして彼は、ここでまたもやこのモデルからの重要な偏倚を探し求めたのです。社会過程において演じられる物質的な、とくに経済的な利害の役割について言えば、彼は、はっきりと多元論の立場をとっており

ます。発達した工業制度の社会的諸条件についてすら、その発展は専ら物質的な利害によって規定されるものではないと、彼はみておりました。むしろ物質的な利害のダイナミズムと並んで、観念的な利害のダイナミズムがある。歴史過程を分析する場合には、この二つの要因群が同じ程度に顧慮されねばならない。ヴェーバーがマルクスから最も遠く隔たるのは、言うまでもなくここにおいてであります。マルクスと対立しながらヴェーバーは、いかなる種類のものであれ、究極の価値に導かれていることを自覚した個人は、事情のいかんでは、歴史過程のなかにおける最後の潜勢力でありうる、もうこれ以上整約することのできぬ最後の潜勢力でありうる、ともかくその個人が与えられた社会的現実を自己の究極の価値に従ってつくりかえる道を見いだすかぎり、そうしたものでありうると、固く信じております。——その価値が現実の常態と矛盾するところが大きければ大きいだけ、その作用力は大きい。——社会変動にかんするこの着想は、ヴェーバーの厳しい理想主義的な思想に照応するものであって、原理上マルクス主義理論と両立いたしません。

それにもかかわらず、この点においてヴェーバーとマルクス——すくなくとも 1844 年の哲学的草稿のマルクス——とのあいだには、ある親近性が成り立ちます。レーヴィット (Karl Löwith) は、あの巨匠の風格を漂わせた論文のなかで、この二人の思想家が同じ核心的問題、すなわち、伸びゆく産業社会の諸条件のもとで、大衆の人間らしい生活を、将来にわたってどうすれば確実なものにしていけるか、という核心的問題と取り組んだことを示しました。マルクスの議論は、資本主義の生産態勢のもとで労働者は自分自身を疎外する、換言すれば、労働者はその自然的人権を奪われている、といったものでした。他方でマルクスは、資本主義体制それ自体が、長いあいだには、自分自身を破壊して新しい社会秩序を用意する諸力を生み出すと想定できるほど楽天的でありました。ヴェーバーもまた、近代の工業制度が人間性を剝奪していく作用にたいして、動揺を感じておりました。しかし彼にとって労働者階級の客観的な窮乏状態、あるいは主観的にすぎないかもしれぬ窮乏状態は、生産手段からの労働者の分離がそうであったように、副次的な役割を

演じただけです。彼の熟考の中心にあったものは、匿名の官僚制的諸機構のなかから生じ、資本主義が勝利するところのどこにでも生れてくる、人間を危機に陥れる傾向でありました。官僚制化の過程、厳密に言えば、純目的合理的な組織形態のあらゆる社会分野への不断の浸透は、ついに新たな隷従に向いうるし向わざるをえない、そのときあらゆる価値志向的な社会的行為は、全能の官僚制的構造と形式的な法律規則のキッチリ編まれた網の目によって窒息させられてしまうだろう、とこのようにヴェーバーは予見しました。それゆえ資本主義体制の否定的な側面にかんして、マックス・ヴェーバーはマルクスの診断と少くとも部分的には一致していたのです。

しかしながらマックス・ヴェーバーは、マルクスの解決策には同意いたしません。彼は、産業社会のなかでどうすれば大衆のために人間らしい生活が長期にわたって保証されるか、という問題を解決するうえで、マルクスの解決策は不十分でもあるし不適當でもあると考えました。まず彼は、資本主義体制の必然的没落にかんするマルクスのテーゼを疑いました。その二つの根拠をごく手短かにお話ししましょう。

彼は、資本集中論、窮乏化論、恐慌論に戦いを挑みました。とくに後の二つは、社会民主党によって強調されるいわゆる生産の無政府性について彼が語る時、間接に問題とされています。彼の論難のかなめはこうです。すなわち、社会がブルジョアジーもしくは資本家と労働者大衆とに分極化することとは正しくない、と。当時すでに彼はつぎのように予見しておりました。産業上の官僚と呼ばれる新しい階層、職員層というものが急速に増大する、そればかりか中間層においても労働者層自体のなかにおいても、分化の過程が進行中である、これは社会の分極化にかんするマルクスのテーゼが、見通しうるかぎりでの将来について誤謬であったことを示すものである、と。さらにかなめとなる点は、彼が、生産手段の私的な領有の廃棄と社会主義的欲求充足経済への移行の結果、労働大衆の状態は改善される、という議論に激しく反論したことです。マルクスによってあれほど強調された生産手段からの労働者の分離について言うと、ヴェーバーはこれを私的所有に基づく社

会秩序に固有のこととみるのではなく、あらゆる近代的社会秩序一般に固有のこととみたのです。時として彼は、これも経営手段から分離されている大学助手の例を持ち出しましたが、私もこの問題は非常に広い範囲を被う問題であると思います。

以上によって明らかなことは、生産手段の私的領有とか財産の不公平な分配とかが疎外なり労働者階級の否定的特権化なりの原因ではなくて、資本主義体制がますます急速に生み出してくる全能の官僚制的支配構造こそがその原因である、とこのようにヴェーバーが確信していたということであります。したがって生産手段の国有化は、個々の労働者のおかれた立場をさらに低下させるということになります。生産手段の国有化は、労働者をその疎外された地位から解放するのではなく、逆に疎外状況をいっそう悪化させるだけからです。ひとつ引用してみましょう。

「合理的に社会主義的な単一経済もまた（いやまさしくそうしたものが）、全労働者の収奪を必ずや保持し続けるだろう。この収奪は、ただ私的所有者の収奪を通してのみ完成されよう。」

この収奪 (Expropriation) ということこそ、ヴェーバーによれば、経済の——および間接には社会体制全般の——官僚制化のいっそうの強化と同義でありました。生産手段の社会化によって労働者は自由の身になるのではなく、反対に生産手段を自由にする者にますます依存するようになる、と彼は言い、労働者の具体的な生活状況にとっては、それが資本主義的企業家であろうが、経営者であろうが、企業家の役目を果す国家官僚であろうが、そうした区別はさして重要な意味は持たない、としました。社会主義の原則の貫徹とともに新しい社会的な心性も形成されるとのマルクスの期待にたいして、ヴェーバーは非情に、社会化とともに現れるのは社会体制の内部での利害状況の移動にすぎないのであって、人間にたいする人間の支配そのものはすこしも除去されない、と言いきったのです。

1917年のドイツには、高度の国家統制を伴った戦時経済の形式を戦後に持ち越し、かようにして段階的に社会主義体制へ移行すべしという議論があり

ました。ヴェーバーはこのような提案にたいして激しく抗議しました。引用します。

「私的資本主義を一步一步掘り崩すということは、理論的には考えられましょう。だがこれは、私的資本主義の何たるかを知らぬ多くの文筆屋の夢想するほど容易なことではなく、むしろ戦後の事態がそうなるとも思われない。しかしかりにそうなったと仮定してみよう。——その実際上の意味は何であろうか。近代的な営利活動の鋼鉄の枠の破壊だろうか。否である。むしろ国営化された経営体の管理も、あるいはなんらかの“共同経済”のなかに引き継がれた経営体の管理も、官僚制的になる、ということである。」

彼の見解によれば、こうした事態は、官僚制化の時代に自由な社会が生き残っていくチャンスをますますなくしていくことにほかなりませんでした。これこそ人間にふさわしい社会の危機です。もうひとつ引用します。

「死んだ機械と手を結んで、官僚制は、未来の隷従の容器をつくり出す働きをしている。もしも純技術的にすぐれた、すなわち合理的な、官僚による行政と事務が、人間にとって、懸案事項を処理する仕方を決める場合の唯一究極の価値であるとするならば、人間は、多分いつの日にか、古代エジプト国家の土民のように、力なくあの隷従に屈服せざるをえなくなろう。」

この観点に立つとき、彼にとって社会化は一步後退だったのです。現在進行中なのは、ともかく官僚の独裁であって労働者の独裁ではない、このように彼ははっきりと申します。

マルクスとヴェーバーが根底から違う点は、産業資本主義の構造的な欠陥を根本的に除去するチャンスをめぐってばかりではなく、資本主義社会自体の本性の分析においても認められます。ヴェーバーの見解によれば、高度に発達した資本主義社会ですら、その構造は、マルクス主義の階級モデルのように単純ではありません。ヴェーバーが、当時の市民的な同時代人とは違って、階級および階級闘争の概念を原則的に受け容れたことは申すまでもあり

ませんが、しかし彼は、カール・マルクスの理論に認められるような、それらの決定的役割にたいしては異を唱えました。プロレタリアート自体の内部における増大する階層分化という事実だけをみても、階級所属の要因に疑問が投げかけられる。特定階級への個人の緊縛は緩み、経済的階級状況によっては直接規定されない他の要因に眼が向うわけです。ヴェーバーの見方によれば、マルクス主義の意味における階級的利害は、特別の状況、いわば限界状況において決定的に重要でありうるけれども、いつもそうではありません。彼によれば、異常な歴史的状況においてのみ、マルクス主義の見本どりの階級行動が現れる。いやこの場合ですら、大衆は、他の階級に所属する人びと、ふつうインテリであります。そうした人びとの指導なしには、なにごととも達成しえない、このようにヴェーバーは強調するのです。

ゲオルク・ルカーチ (Georg Lukács) によるいわゆる虚偽意識の問題の解決、すなわち、階級の諸部分が現実の階級利害にかんして誤ることはあっても、階級自体の利害は客観的に不動であるという主張は、ヴェーバーによって最も厳しく退けられました。それは似而非科学的な戦略であって、真の問題はこれによって欺かれ曖昧にされる、というのです。ヴェーバー自身の言葉を引用しましょう。

「おなじ階級状況にある人間は、経済的境遇のようにはっきりと感じとれる境遇にたいしては、ふつう大衆的行動を通して、いちばん平均に近い利害方向に向って反応する。これは歴史上の事件を理解するうえで、まことに単純ではあるが重大な事実である。しかし、かといって、そこから“階級”なり“階級利害”なりの概念を、現在さかんにやられているような似而非科学風のやりかたで操ってはならない。ある有能な著述家のつぎのような主張は、そうしたやりかたを古典的に表現している。いわく、個人が自分の利害について誤ることはありえても、“階級”は自己の利害について“無謬”である、と。」

ヴェーバーがこのテーゼを拒否したのは、諸個人ないし諸集団の社会的行為が専ら経済的利害によって規定されることは決してないと確信していたから

にはかなりません。加えて、とりわけ事情の入り組んだ産業社会にあっては、諸個人の階級状況、階級利害は一義的でないのがふつうである、と彼は考えます。この考えは、『経済と社会』でヴェーバーが未完成ながら展開した階級の成層 (Klassenschichtung) にかんする理念型のカズイスティクのなかに現れております。それは、マルクスのモデルと較べてじつに特徴的な偏りをみせるものです。というのは、階級の成層について唯一のモデルを提出するかわりにヴェーバーは、そこで、すくなくとも三つの異なった類型を、マルクスとは違う観点から展開しているからです。

第一は財産そのものの処理、第二は財貨や給付の市場利用のチャンス、第三は社会的集団ないし成層の社会的地位であって、ヴェーバーはこれらの観点から、「財産階級」(Besitzklassen)、「営利階級」(Erwerbsklassen)、「社会階級」(soziale Klassen)を区別いたします。ヴェーバーが階級の成層をこれら三つの異なった形に分けるのは、諸集団・諸個人の類型的に同一の利害状況と規定される階級状況が本来多層的なものであり、限界的な場合においてだけ完全に一義的であるにすぎないことをはっきりさせるためであります。ここでは階級の成層にかんするこの極度に入り組んだモデルにいちいち立ち入ることは止め、つぎのことを強調するにとどめたい。

まず第一に、社会の型の違いに応じて、財産の構造の違いによって、違った階級利害が有力になることを、ヴェーバーは指摘いたします。もしある社会が純粹に財産によって方向づけられているならば、そうした社会には、経済の管理中枢機構を握ることこそが眼目であるような社会におけるのとは、異なる階級モデルがある。

つぎに第二に、これらのモデルは、マルクス主義のモデルでは一義的である階級のなかにも、多様な経済的・政治的利害があるのではないか、という難問に答えるものです。たとえば、レントナーは安定的な経済制度に賛成するのがふつうであって、したがって保守的な政治に味方する。これにたいして企業家の機能を代表する経営者は、ダイナミズム、つまり急速な経済成長に賛成であって、だから政治的にはリベラルである。そればかりかヴェーバー

は、資本主義社会、いや社会一般において、階級闘争、階級矛盾といわれるものが、いたるところに存在すること、これはそれだけでも、ことからの成行きを規定することを示します。あるいは示そうと努めます。そのことは、階級の成層にかんする第三の類型、すなわち「社会階級」のなかに反映しております。そこでヴェーバーは四つの階級を区別します。第一は労働者階級、第二は小市民層、第三は無所有のインテリ、それから高度の資格を有する専門家と職員、最後に第四に財産と教育にもとづく特権階級。たとえこの階級分割が幾分厳密性を欠くとしても、このことは、ヴェーバーが階級所属と社会的地位とを区別して、それらをそれぞれ独立の要素とみなしたことをうかがわせるに充分です。ヴェーバーの行った観察は、1920年以後の社会主義体制の展開によって、少なくとも傾向としては実証されたところである、このように主張することができましょう。マックス・ヴェーバーが官僚制の危険を、少なくとも短期的には重く見すぎたとしましても、産業労働の世界における人間の自己疎外の最も重要な原因が所有秩序そのものにはなくて、管理構造のもつ全能の力にあることは疑う余地がありません。そればかりかヴェーバーは、醒めた眼をもって決定的に重要な問題を指摘しました。官僚制のなかでの新しいエリート——社会主義的な意味における社会構造の編成替えによって作り出される新階級——の性格という問題がこれです。

三番目に極めて大切なことは、所有という標識よりも遙かに重要なのは、経済の中枢部の操作を事実上掌握するという問題です。経営者層 (Managerschicht) が握っている事実上の管理はいかに行わるべきかというこの問題性は、資本主義か社会主義かの問題とまったくかかわりありません。ヴェーバーはただ、社会主義社会の管理よりも資本主義社会の管理のほうがうまくいくというテーゼを主張しているようです。

社会主義者の理論にたいしてヴェーバーが批判を加えたということは、しかし、彼がみずから体験した資本主義下の社会状態に満足していたことを意味するものではありません。いかにも彼は、労働者の状態をマルクスの言うほど絶望的には見ませんでした。のみならず彼は、労働者の救済にかんする

マルクスの提案を部分的に甚だ眉つばものだと考えておりました。その主要な論拠はすでにお話ししたとおりです。すなわち、生産手段の社会化は階級闘争に終止符を打つものでは決してない、なぜならそのことによって変わるのには、ただ経済の中枢部を握っている日の当る階級の組立てにすぎないから。しかも体制内部の労働者階級の地位に目立った変化は起らない。ヴェーバーはさらに議論を進めてこんなふうに申します。そのとき労働者は匿名の国家官僚制の全能の統制に服することになる。この匿名の国家官僚制は、階級矛盾が激化した場合にはつねに国家の干渉に期待を寄せる私企業家群よりも遙かに強力である、と。つぎの引用を参考にしてください。

「げんざい国家の政治的官僚とカルテル・銀行・大経営の私経済的官僚とがべつべつの団体として並立しており、だから政治権力によって経済権力をともかく抑えることができるけれども、社会主義のもとでは、このふたつの官僚層が利害を同じくするひとつの団体を形成してくるから、統制はまったくきかなくなろう。」

さて、以上のことがいっそう原則に触れる問題を孕んでいること、申すまでもありません。すでに1906年、マックス・ヴェーバーはロバート・ミヘルスにつぎのとおり書き送っていたのです。現代テクノロジー社会の諸条件のもとでは、——引用いたします——「どんなに社会主義的な社会体制によろうとも、どんなに脳味噌をしぼって考え出したデモクラシーの形式によろうとも、人間にたいする人間の支配が除去できるなど、ユートピアにすぎない。」ヴェーバーによれば、現代産業社会の状態のもとでは、労働者階級の完全な解放はついに不可能だったのであります。この点においてヴェーバーが諦めを説いたというのは正しくありません。反対です。自由主義的な市場志向的資本主義経済のなかで、労働者階級のために最大限の社会的・政治的自由をかちとることにエネルギーを傾注するあらゆる政治運動にたいして、彼は最大の共感を示しました。労働者階級が資本主義体制そのものに反抗するばかりで、社会的生産物の応分の分け前を戦いとることをしないという事実は、彼の見方によれば、労働者階級とその政治組織が政治的決定にまだ充分参与

していないという事実に、主として帰せられるべきことでありました。ヴェーバーは、社会民主党にたいするドイツ市民階級の馬鹿げた恐怖をあざ笑いました。社会民主党をば適当に政治過程に与らせるなら、この党について恐れることはまずない。――

さて、ここであらためて問うてみましょう。資本主義とその強力な同盟者たる近代官僚制がつくり出した諸条件のもとで、マックス・ヴェーバーはどんな解決策を頭に描いていたのか。彼の答は一見矛盾しているようにみえます。問題の小綺麗な解決はありえないと信じ、生産手段の国有化は労働者の状態をいっそう悪化させると信じるどころから、彼は、資本主義体制のなかから最良のものを、取り除くのではなしに、これをつくり出すよう求めました。なかでも、資本主義体制のダイナミックな要素を、ありとあらゆる手段をもって強化しなければならぬという主張です。それゆえ彼は、経済的にも社会的にも、自由競争を最大限可能ならしめるような要素の存続を主張しました。停滞的な資本主義体制ではなく、高度の社会的移動を伴った拡張的資本主義体制が彼の理想でありました。今日の言葉で言うならば、ヴェーバーは、はっきりした経済成長論者(ein Mann des wirtschaftlichen Wachstums)でした。経済成長と社会的移動がともに作用して労働者層の地位向上を極大化するというわけで、彼は二通りの要求を提出しております。まず資本主義経済におけるダイナミックな要素の強化。したがってレントナーには不利な地位を、経営者には良い地位を、そしてできるかぎりの競争の強化を。そしてつぎには、あらゆる社会的集団が、法制度の枠内で、その社会的ならびに経済的な利害を強く代表しうるような完全に民主主義的な制度の創出。ヴェーバーはロバート・ミヘルスにたいしてこの解決策だけではまだまだ言い尽くせていないことを認めるに吝かではなかったのですが、しかし、もしもこれらが達成されるようなことがあるとしたら、それこそ御おんの字であると、付け加えました。

マルクスにたいするヴェーバーのこうした立場が、矛盾とは言わないまでもいろいろな問題を孕んでいること、申すまでもありません。というのは、

これは一方で、経済の領域のみならず全社会における自由競争のダイナミックな作用に根ざすものでありながら、他方ではカルテル・トラストその他の経済の領域やさらに国家の領域における独占体のまさしく不断の成長をば、官僚制時代の典型的な開拓者だとするものだからです。みずからの構想に潜むこの明白なアポリアについて、ヴェーバーは一度も体系的に論じておりません。この問題をめぐる彼の立場をはっきりさせようとするれば、むしろ問題の周辺部を探ることが有益です。

1905年にヴェーバーが精力的に取り組んだ問題があります。それは、労働者層と企業家層との利害対立の死闘を、労働組合による労働争議のかたちで処理していくという彼のそれまでの立場が、巨大経営と強大な上部労働者組織との出現を前にしては、もう時代遅れになっていはいはしまいか、という問題です。そのとき彼の考えはこうでした。国家のなすべき仕事は、適切な立法措置を通して、賃銀および労働条件をめぐる不断の闘争におけるチャンスの等しさを、労働者および労働組合と企業家とのあいだに再びつくり出すこと。もちろんこれは、労働者の自由で自発的な行動にできるだけ足枷をはめないようなかたちでなされるべきことでした。だからヴェーバーは、企業家の力が増大していく時代において、労働者層のおかれた諸条件を、その出発点において改良することを目標とした社会政策を、一貫して主張したことになります。これを一般化すればつぎのようになります。国家は、社会全般が官僚制化し硬直化していく過程に対抗して、いわば矯正手段になるべきである、と。このような解決の前提には、国家は国家として、経済的・社会的な過程にたいしてひとつの独立の立場を有する、ということがあります。いやさらに進んで、国家は支配階級に奉仕する道具以上のものである、ということがあります。

ここに、私見によればヴェーバーの政治社会学で充分には解かれていない難問が現れます。というのは、純政治社会的にヴェーバーの念頭に浮んでいた国家の権力機構は、官僚制的組織として、その他の社会組織とまったく同じ性質をもつものだったからです。——もっとも国家の法的地位は、他の

組織と較べてなにほどこか優るものではありませんが。——にもかかわらずヴェーバーの理論の前提には、国家が社会過程における自立的な要因だということがある。いやさらに一步を進めて、ひとはこう言うことができます。ヴェーバーは、資本主義の構造的問題の解決を、すくなくとも部分的には政治の領域に求めた、それはカリスマ的な味付けを持った人民投票的な民主制への賛成を介してである、と。これはすでにハーバート・マルクーゼ (Herbert Marcuse) が注意を促したことです。民主主義的なかたちはとっているが、しかし同時に洞察力と指導力に恵まれたエネルギー的な政治家に導かれた政治制度は、広汎な大衆の地位を向上させる力を持ちうるというのが、ヴェーバーの見方でありました。国家権力の粉碎にかんする社会主義者の立場、それはレーニンが初めて一貫して定式化し実践に移したところですが、ヴェーバーはこれを自分の理想に反するものと捉えました。そこで多分こう言うことができます。ヴェーバーは短期的には負けたけれども、長期的には歴史が、レーニンにではなくヴェーバーに軍配を上げた、と。——ともかく端倪すべからざるヴェーバーの立場は、いろいろに解釈することができます。実際ヴェーバーの中には二つの魂が住んでいて、たがいに戦火を交えているのかもしれませんが。一方でヴェーバーは、自由競争が病を癒す手段でもあり、社会のダイナミズムを発揮させる手段でもある、と信じています。他方ヴェーバーの理論の中には、国家すなわち政治の法廷が活躍しなければならぬ、自由競争のモデルがなんらかの要因によって侵害される瞬間には国家が動き出さねばならぬ、という狙いがあります。

さて、資本主義体制内での労働者層の部分的な解放をかちとるチャンス、これは労働者層が政治権力に参加するなかで生ずるものですが、そうしたチャンスは、生産手段の社会化によって少なくなると、ヴェーバーは信じておりました。ここにまたしても先程の議論が現れます。すなわち、生産手段が社会化されるならば、行政と結びついた生産と分配の強力な官僚制機構を統制することはほとんど不可能になる、ところが複数の官僚団が存在する条件のもとでは、統制はともかくある程度まで可能である、というあの議論で

す。もとよりヴェーバーは、社会主義体制が巨大な官僚制機構を新たに生み出してくるといふディレンマを回避できるかもしれないこと、そのような社会主義体制も考えられることを、原理的には認めておりました。たとえば、経済の組織を極端に地方分権化することを通じて。あるいは、市場における経済競争の調整機構を犠牲にして、場合によってはあらゆる合理的な貨幣計算を廃止して、労働者層の地位を強化することを通じて。しかしそうした議論はヴェーバーの採るところではなかった。なぜならそのようなかたちの社会主義は、すべて、ヴェーバー理論のかなめをなす概念たる「形式的合理性」(formale Rationalität)——これは、大まかに言うと、制度に備わる能率(Effizienz)というふうに翻訳できますが——この形式的合理性を著しく低下させる副作用を伴わざるをえなかったからです。マックス・ヴェーバーは、理論的には、思考可能な社会主義的社会秩序の多くのものを吟味しましたけれども、しかし彼は、社会主義体制が長期に亘って存続しうるのは、ただ中央集権化された国家経済的制度としてだけである、と考えたのです。資本主義的な型の交換経済と較べてみると、そのようなかたちの経済組織のもつ欠陥は彼の眼に明白でありました。

『経済と社会』の一番あとで書かれた数節のうちのひとつ、これは多分ここミュンヘンで書かれたものと思われませんが、その一節において、こうした問題が理念型のカズイステイクのかたちで取り扱われております。これが資本主義と社会主義の関係を一般的に論じた最後の言葉でしょう。そこでヴェーバーは、市場志向的な資本主義経済制度とも言いうる交換経済の制度を、計画経済の制度に対置したうえ、どちらの制度が優れているか、これを科学的手段によって決定することはできないと宣言しながらも、経済における最高の形式的合理性をわが手にしうるのは、交換経済を措いてほかにはないことを明瞭ならしめております。社会主義の経済制度のもとでは、形式的合理性が著しく低下せざるをえないという問題にぶつかる。とくに、資本主義における市場志向的な価格形成のありかたを放棄する場合にそうである、という。いかにもヴェーバーは、この点について非常に慎重な発言を行い、

一切の価値判断を禁欲して自分を人目に曝さないよう努めてはおりますが、しかし彼の議論の核心は、いつもただひとつのところに落ち着いてしまうのです。すなわち、資本主義はそれ以外のあらゆる経済形式を遙かに凌ぐものである、なぜなら資本主義だけが、あらゆる経済上の操作を純粹に形式的な基礎の上で合理化することができるからだ、と。そしてもしも最高の給付ということと比較の標識に採用するならば、交換経済のほうが計画経済のそれを遙かに上廻ることは明らかである、という。もとよりヴェーバーには、このような議論でもって資本主義の体制を擁護しようなどという意図は少しもなかったこと、これは言うておかななくてはなりません。マルクーゼ、さらにルフェーブル (Wolfgang Lefèvre) のヴェーバー解釈を読むばあい、この論点はとくに重要であります。資本主義を称賛する、経済と社会のあらゆるディメンジョンにおける最高度の形式的合理性を備えた資本主義体制を称賛する、そうした意図をヴェーバーは少しも懐くものではありません。ヴェーバーによる交換経済の理念的な概念の分析をみれば、どうみても交換経済には人を惹きつけるものがないこと、ともかくそれは、ヴェーバーの人格とぴったり重なりあうような資本主義の形式ではないことがわかります。手短かにお話しするとしましょう。

ヴェーバーによる理念型のモデルでは、以下の諸条件によって形式的合理性が極大にまで達します。(1) 市場における自律的なグループ相互の不断の闘争。(2) 市場における無制限な競争による価格の合理的な計算。(3) 形式的に自由な労働、換言すれば自由な貸銀契約に基づく労働。(4) ヴェーバーの使っている言葉をそのまま挙げておくと、労働者からの生産手段の「収奪」(Expropriation)。そして最後に、(5) 生産手段の私的所有。そのほかなお二三の境界条件が付け加わりますが、ここでは省略します。ところで、ここでは初期資本主義時代がモデル構成に役立っていると仮定してみれば、これらの条件の多くが、高度資本主義の状態のもとではもはや満され難いということに、諸君はすぐ気づかれるでしょう。とするとヴェーバーは、このカズイスティクをつくりあげた時点ではすでに過去のものとなっていたひとつの

幻像を記述したのでしょうか。いやこんなふうにするのは、的はずれもいいところですよ。じつのところヴェーバーの関心は、資本主義の特性をば、資本主義の純粋な形において記述するところがありました。そのさい彼の採った方法は、マルクスのそれに酷似するものだったのですが。そのさいヴェーバーの意図は、ルフェーブルの主張にみられるようなもの、つまり形式的合理性をば資本主義の根本原理とすることによって、社会主義者の批判にたいする免疫力を資本主義につけてやる、というようなものではありませんでした。ヴェーバーは近代資本主義の形式的合理性を前面に押し出し、しかもこれを実質的合理性と一致させることによって、彼は近代資本主義の非合理的な性格を隠蔽しようとしたのだ、というマルクーゼの批判も同工異曲のものです。ヴェーバー自身はと言えば、十二分に首尾一貫してというわけにもまいますまいが、しかし彼は、体制の形式的合理性と実質的合理性とを区別しております。形式的合理性と実質的合理性とは、しばしば食い違いうること、これは彼に明らかでした。しかも折にふれて彼は、形式的合理性の極大は不可避免的に実質的合理性と結び付いていると申しました。彼が明らかにしようとしたのは、ただ、資本主義的な交換経済、市場経済、競争機構の純粋型からの偏倚は、体制の効率低下に結び付かざるをえない、ということであります。

以上の観察を通じてわかることは、ヴェーバーの資本主義分析が決して心酔者ふうのものではないということです。それは冷淡といつていいほど冷静かつ慎重であります。ヴェーバーは資本主義をその現状よりも良いものにしようと企てることはいたしませんでした。しかし資本主義か社会主義かという二者択一的なはっきりした態度を打ち出すこともいたしませんでした。誠実な社会主義者の心術を高く評価したにもかかわらず、マルクス主義の処方西洋の近代社会に固有の問題をあるいは解きうるかもしれないなどとは、思いもそめぬことだったのです。資本主義の欠陥を知りつくしていたにもかかわらず、彼はこの体制を、社会主義的経済秩序のどんな形式よりもよしとしました。彼の確信によれば、社会主義がその道徳的原理の実現に本気で取り組もうとすれば、テクノロジーと文明とにおいて重大な後退を余儀なくさ

れざるをえない、もしくは巨人的な官僚制度を生み出さざるをえなくなって、一般大衆および労働者層はその前になす術を知らぬといった状態が出現するはずでした。こうした光景を描いてみると、官僚制時代における自由な社会の存続のためには、いかなる形式の社会主義よりも資本主義のほうが遙かに好ましい条件を備えている、このように彼には思われたのです。

マルクス主義の発想にたいするヴェーバーの批判は、多くの点で今日なお注目に値すると、私は思います。なかでも、財産の分配それ自体よりも企業家的立場を社会的に統制することのほうが肝心かなめの問題点だという彼の見方は、まさしく今日の問題を言い当てております。東方の硬化した共産主義的諸制度もこれに注意を払うはずです。生産手段の私的な領有の廃棄は、場合によっては現代の焦眉の問題を解決する道でありえましょう。だが場合によっては、それは事態をいっそう悪化させるだけに終るでしょう。それゆえ現代の社会主義理論は、とりわけつぎの問題と取り組んで一定の答を出さねばなりません。それは、経済と社会の機能は、決断なき官僚や権威を笠の新エリートの手引き渡すことなしに、どうすれば効果的に統制できるか、という問題です。この問題にかけてのヴェーバーの分析は、彼と信念を分ちえない人びとにとってもまた、注意を惹くに充分です。どうすれば資本主義社会の欠陥を除去できるかについて、簡明な処方箋を彼は示さなかった。しかし彼は決定的に重要な諸問題を、ずばりと指摘しました。そのかぎりマックス・ヴェーバーを指して、偉大な精神上の対蹠者カール・マルクスに匹敵する自由主義の社会学者と名づけることは、まったく当をえたことであります。

ご清聴ありがとうございました。